

—若手技術者のコーナー—

西日本豪雨の災害復興に向けて

1. はじめに

平成28年に愛媛県に入庁してから早2年半が経った。県南部に位置する南予地方局の道路課に配属され、道路改良・維持事業に携わってきたが、それだけでなく短期ではあるが熊本県への被災地派遣を希望し、河川災害復旧工事にも携われたことは貴重な経験となった。県下で西日本豪雨の復興が急務となっている今、被災地派遣での経験を振り返りつつ、災害復興に向けた今後の抱負を語りたいと思う。

2. 熊本県阿蘇管内の復興状況

私は被災地派遣を希望し、平成30年4月から7月末までの4ヵ月間、熊本県阿蘇地域振興局に勤務していた。着任時点では、熊本地震発生から2年が経っていたが、未着手箇所がまだ残っており、完全な復興への道のりはまだまだ長いように感じた。工事の進捗が遅れている原因は幾つか考えられるが、一番は業者の人手不足であろう。平成28年4月に受けた熊本地震による被害だけでなく、同年6～7月の豪雨による被害もあり、被災箇所は阿蘇管内の河川だけで200件を超えていた。加えて査定決定額1億円を超える大規模な被災箇所が20件近くあり、阿蘇管内の業者だけでは手に負えないほどの量・規模であった。また、復旧工法の大多数がブロック積や石積であるため、石工の確保が困難となり、施工が滞ってしまうケースもあった。それでも入札制度を見直し、管外業者が参入しやすい環境を整えたことで人手不足は解消に向かっており、復興に向けて着実に前に進んでいるように感じた。

3. 被災地支援で得たこと

阿蘇地域振興局では主に河川災害復旧工事の実施を担当していた。河川はもとより災害事業の経験も乏しかったこともあり、苦労は絶えなかったが、愛媛県では経験できなかった大規模な工事を担当することができ、大きなやりがいを感じることができた。中でも南阿蘇村を流れる白川での落差工復旧工事は特に印象深い工事であった。阿蘇への着任と同時期に施工着手した本工事を、任期終了までに完成させることを目標に取り組んだ。工事監督をするうえで最も意識したのは受注者との連携であり、工事内容

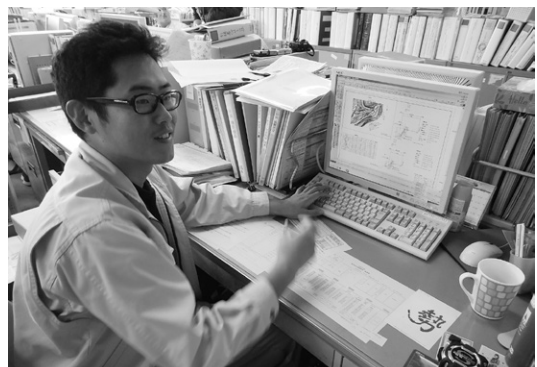
に係る協議は必ず現場で行うようにした。そうすることで、互いの意思疎通がスムーズにでき、迅速な指示に繋げることができた。また、足繁く現場に通ったことで、施工箇所付近の脆弱箇所にも気付くことができ、工事中に県単独費にて補修を行う等、手戻りのない対策を取ることが出来た。受注者との連携を密にすることで、スピーディに、かつより良い現場作りができ、監督員として確かな手応えを感じることができた。



落差工施工状況

4. 西日本豪雨の災害復興に向けて

故郷が豪雨被害を受けていた7月、阿蘇にいたために何の力にもなれず、もどかしさを感じていたが、今となっては本格的な災害復興が始まる前に被災地派遣を経験することができてよかったと感じている。これからは被災地で得た知識、経験そして人脈を活かし、一日も早い災害復興に貢献していきたいと思う。そして、そのための第一歩として、まずはまだまだ残っている災害査定に全力を注いでいこうと思う。



職場にて

(愛媛県 南予地方局 道路課 岡本 昌也)